



矢野邦夫

浜松市感染症対策調整監 兼  
浜松医療センター 感染症管理特別顧問

Twitterのアカウントを開設しました。CDC関連の  
情報を発信しています (@KuniYano)



## 2022～23年の季節性インフルエンザワクチンの有効性

CDCの週報 (MMWR) に、2022～23年の季節性インフルエンザワクチンの有効性の暫定推定値が記述されているので紹介する [<https://www.cdc.gov/mmwr/volumes/72/wr/pdfs/mm7208a1-H.pdf>]。

### はじめに

米国では、2022～23年のインフルエンザの流行が例年より早く始まり、2022年10月に増加して、小児の高い入院率をもたらした。この期間中に検出され、サブタイプが特定されたインフルエンザウイルスのほとんどはA (H3N2) ウイルスであったが、A (H1N1) pdm09ウイルスも流行していた。ほとんどのウイルスは、2022～23年に北半球で接種されたインフルエンザワクチンに含まれるウイルスと同じ遺伝的サブクレードにあり、抗原的に類似していた。この報告では、2022年10月23日～2023年2月10日の期間にウィスコンシン州のマーシュフィールド・クリニック医療システムが実施した2つの研究データを使用して、インフルエンザワクチンの有効性 (vaccine effectiveness, VE) を推定した。

### 研究1

生後6ヵ月から64歳における、外来受診を必要とするインフルエンザに対するVEが診断陰性例コントロール試験 (test-negative case-control design) を用いて推定された。期間は2022年12月2日～2023年2月10日で、合計545人の小児、青年、成人が研究の対象となった。

そして、116人 (21%) がインフルエンザAウイルスの検査が陽性で、インフルエンザBウイルスの検査が陽性の人はいなかった。116人のなかの115件 (99%) のインフルエンザAウイルスのサブタイプのうち、29件 (25%) がA (H1N1) pdm09ウイルスで、86件 (75%) がA (H3N2) ウイルスであった。また、特徴付けした43件のウイルスはすべて、インフルエンザワクチンの成分と遺伝的に類似していた。

研究対象の545人の急性呼吸器疾患患者のうち、186人 (34%) が2022～23年のインフルエンザワクチンの接種証明書を持っており、ワクチン接種を受け

た参加者の大多数 (84%) が、細胞培養由来ワクチンを接種していた。外来受診を必要とするインフルエンザ (インフルエンザAウイルスに関連) に対するVEは54%であり、A (H3N2) ウイルスに対しては60%であった。

### 研究2

小児および青年における症候性インフルエンザに対するVEが前向きのコホート研究から推定された。1～17歳の241人の対象者のうち、94人 (39%) が2022～23年のインフルエンザワクチンの接種証明書を持っており、84%が細胞培養由来ワクチンを接種していた。2022年10月23日～2023年2月10日の期間において、37人 (15%) がインフルエンザAウイルスの検査が陽性であった。ただし、これらのうち3人はインフルエンザワクチン接種後14日以内に発症したため、研究から除外された。解析に含まれた残りの34人のうち、29人はA (H3N2) ウイルス、1人はA (H1N1) pdm09ウイルス、4人はサブタイプ不明のインフルエンザAウイルスであった。インフルエンザAの6人 (18%) の小児が、2022～23年の季節性インフルエンザワクチンを接種していた。症候性インフルエンザAに対するVEは71%であった。

### 結語

これらの研究結果は、インフルエンザワクチン接種により、65歳未満の外来受診を要するインフルエンザのリスクと、小児および青年の症候性インフルエンザのリスクが大幅に減少したことを示している。CDCは、インフルエンザウイルスが流行している限り、生後6ヵ月以上の人々に年1回のインフルエンザワクチンを接種することを推奨する。

### 今月の 矢野編集長



7月1日リリースのeラーニング「CandY Link」の「月イチゼミ」の収録のために、メディカ出版本社に行った。とてもうまく収録できた!